第3章
資料1　成分名一覧

解熱鎮痛薬、鎮咳去痰薬、鼻炎薬、風邪薬、うがい薬、酔い止め　※成分名の下線部：ここを覚えることで、何の薬かを判断することができる

解熱鎮痛薬	中枢性解熱鎮痛成分	アセトアミノフェン	抗炎症作用ほとんどなし。OTC医薬品のうち、基本的に小児（15歳未満）に使われる解熱鎮痛成分はアセトアミノフェンである。他に使えるものにエテンザミドとサリチルアミドがあるが、これらは水痘・インフルエンザの時は使用できない。
ピリン系解熱鎮痛薬	ピリン系成分	イソプロピルアンチピリン	OTC医薬品唯一のピリン系解熱鎮痛成分である。薬疹の副作用に注意する。
解熱鎮痛消炎薬	プロピオン酸系成分	イブプロフェン	イブプロフェンピコノールはニキビ薬なので混同しないこと。 重篤な副作用：肝機能障害、腎障害、無菌性髄膜炎
		ロキソプロフェン	※現時点、手引きへの記載はありません。
	サリチル酸系成分	アスピリン（アセチルサリチル酸）	重篤な副作用：アスピリン喘息（ただし、アスピリン特有の副作用ではなく、他の解熱鎮痛成分でも生じる可能性がある。） ライ症候群との関連性から15歳未満の小児は使用不可。ピリン系成分ではない。
		エテンザミド	ACE処方の中の一成分である。エテンザミドは胃でサリチルアミドになる。
		サリチルアミド	
鎮咳薬	非麻薬性鎮咳成分	ノスカピン	延髄の咳嗽中枢に作用する。
		ジメモルファンリン酸塩	
		デキストロメトルファン臭化水素酸塩	
		クロペラスチン塩酸塩	
		チペピジンヒベンズ酸塩	
	麻薬性鎮咳成分	コデインリン酸塩	延髄の咳嗽中枢に作用する。モルヒネと同じ構造を持ち依存性がある。原則、本剤を12歳未満の小児等に使用しないこと。副作用：眠気、便秘
		ジヒドロコデインリン酸塩	
気管支拡張薬	アドレリン作動成分	メチルエフェドリン塩酸塩	
		マオウ	エフェドリンが主成分である。
		トリメトキノール塩酸塩	
	キサンチン誘導体	ジプロフィリン	気管支平滑筋に直接作用する。中枢神経興奮作用があるので、てんかんの人は要相談である。心臓刺激作用を示し、副作用として動悸がある。
去痰薬	気道粘膜分泌促進成分	ブロムヘキシン塩酸塩	分泌促進作用・溶解低分子化作用・線毛運動促進作用を示す。
		グアイフェネシン	（別名：グアヤコールグリセリンエーテル）
		グアヤコールスルホン酸カリウム	
	粘液成分調整成分	カルボシステイン塩酸塩	痰の中の粘性タンパク質を溶解・低分子化して粘性を減少させる。及び、粘液成分の含量比の調整作用。
	粘液溶解成分	エチルシステイン塩酸塩	痰の中の粘性タンパク質を溶解・低分子化して粘性を減少させる。（痰のジスルフィド結合（-S-S-）切断による作用。）
		メチルシステイン塩酸塩	
	気道粘膜潤滑成分	アンブロキソール	※現時点、手引きへの記載はありません。
抗ヒスタミン薬	第一世代	クロルフェニラミンマレイン酸塩	
		ジフェンヒドラミン塩酸塩	睡眠改善薬の成分でもある。母乳を与える女性は使用を避けるか、使用する場合には授乳を避ける必要がある。
		ジフェニルピラリン塩酸塩	
		カルビノキサミンマレイン酸塩	
		クレマスチンフマル酸塩	
	第二世代	アゼラスチン	
		メキタジン	まれに起こる重篤な副作用：ショック（アナフィラキシー）、肝機能障害、血小板減少
		フェキソフェナジン	※現時点、手引きへの記載はありません。アレグラFXの成分です。
		セチリジン塩酸塩	※現時点、手引きへの記載はありません。ストナリニZジェルの成分です。
		ケトチフェンフマル酸塩	
抗アレルギー薬	ヒスタミン遊離抑制成分	クロモグリグ酸ナトリウム	
交感神経刺激薬（血管収縮薬）	点鼻	テトラヒドロゾリン塩酸塩	
		ナファゾリン塩酸塩	
	点鼻、内服	フェニレフリン	
	内服	プソイドエフェドリン塩酸塩	体内でのプソイドエフェドリンの代謝が妨げられて、副作用が現れやすくなるおそれが高く、パーキンソン病治療薬、モノアミン酸化酵素阻害剤（セレギリン）を使用中の人は使用を避ける。モノアミンとはドパミンなどの神経伝達物質のことである。
		dl-メチルエフェドリン塩酸塩	
抗コリン薬	抗コリン成分	ベラドンナ総アルカロイド	ベラドンナはアルカロイドを含むナス化の植物である。副交感神経遮断作用があり、昔は女性が目を大きく見せるための散瞳薬として使われていた。
		ヨウ化イソプロパミド	

第3章
資料1　成分名一覧

抗炎症薬	抗炎症成分	グリチルリチン酸二カリウム	鼻炎薬、のどの薬、胃薬、目薬にも含まれる。
		カンゾウ	グリチルリチン酸が主成分である。
		トラネキサム酸	凝固した血液を溶解されにくくする働きがあり、血栓のある人は要相談である。
	消炎酵素成分	セミアルカリプロティナーゼ	フィブリノゲン・フィブリン分解作用あり。血液凝固異常のある人では出血傾向を悪化させるおそれがある。どちらの成分も含有する商品が実在するかどうか不明だが、頻出である。
		ブロメライン	
		リゾチーム塩酸塩	卵白アレルギーの人は使用不可。2016年に有効性が認められず販売中止になった。内服は2018年、手引きから削除された。
鎮静薬	化学成分	ブロモバレリル尿素	鎮痛成分と一緒に配合されることが多い。大量摂取による急性中毒が多く、依存性がある。催奇形性があるため、妊婦は使用を避ける。
		アリルイソプロピルアセチル尿素	鎮痛成分と一緒に配合されることが多い。
	生薬成分	チョウトウコウ	
		カノコソウ	
		チャボトケイソウ	別名：パッシフローラ
		ホップ	ビールの苦味原料である。
うがい薬またはのどスプレー	殺菌消毒成分	ヨウ素系殺菌消毒薬、ポビドンヨード	甲状腺疾患のある人は要相談である。VCと反応して脱色し殺菌力が低下する。
		セチリピリジニウム塩化物	VICKSドロップスに配合されている。
		デカリニウム塩化物	
		ベンゼトニウム塩化物	
	抗炎症成分	アズレンスルホン酸ナトリウム	抗炎症作用と粘膜修復作用を併せ持つ。
酔い止め薬	抗めまい成分	ジフェニドール塩酸塩	内耳にある前庭と脳を結ぶ神経（前庭神経）の調節、内耳への血流改善作用を示す。抗ヒスタミン作用と抗コリン作用がある。
	抗ヒスタミン成分	クロルフェニラミンマレイン酸塩	抗ヒスタミン成分は、延髄にある嘔吐中枢への刺激や内耳の前庭における自律神経反射を抑える作用を示す。
		ジフェンヒドラミンサリチル酸塩	
		ジメンヒドリナート	ジフェンヒドラミンテオクル酸塩（ジフェンヒドラミンと8－クロルテオフィリン塩を合成したもの）の一般名である。
		メクリジン塩酸塩	遅効性だが長時間持続する
		プロメタジンテオクル酸塩	外国において、乳児突然死症候群や乳児睡眠時無呼吸発作のような致命的な呼吸抑制を生じたとの報告があるため、15歳未満の小児では使用を避ける必要がある。
	局所麻酔成分	アミノ安息香酸エチル	胃粘膜を麻酔して嘔吐刺激を和らげる。胃薬に配合されることもある。メトヘモグロビン血症を起こすおそれがあるため、6歳未満の小児は使用不可
	抗コリン成分	スコポラミン臭化水素酸塩水和物	脳の自律神経系に働きかけ、混乱を抑える。末梢では胃の過剰な動きを止める。
	中枢神経興奮成分（キサンチン誘導体）	無水カフェイン	酔い止めの眠気防止のために入っているのではないので注意する。
		ジプロフィリン	甲状腺機能障害又はてんかんの診断を受けた人は要相談である。心臓刺激作用を示し、副作用として動悸がある。

消化器用薬

胃腸薬	制酸成分	合成ヒドロタルサイト　※アルミニウム配合	ヒドロタルサイト（ハイドロタルク石）は、Al（アルミニウム）とMg（マグネシウム）の化合物である。Al脳症、Al骨症の恐れがあり、透析を受けている人は使用を避ける。
		酸化マグネシウム	瀉下剤にも使用される成分なので、下痢の副作用に注意する。
		炭酸マグネシウム	
		炭酸水素ナトリウム	重曹のこと。
		メタケイ酸アルミン酸マグネシウム ※アルミニウム配合	胃内でケイ酸がシリカゲルになり（ケイ素はシリコンのこと）、胃粘膜に被膜を形成して保護する。また、Alを含む成分は透析中の人は使用を避ける。腎機能が低下しているとAlを排出できないため、長期間服用でAl脳症、Al骨症の恐れがある。
		リン酸水素カルシウム	
	健胃成分	オウバク、オウレン、センブリ、ゲンチアナ	苦味による健胃作用を期待して用いられる。
		ケイヒ、ショウキョウ、チョウジ、ソウジュツ、ウイキョウ、コウボク	香りによる健胃作用を期待して用いられる。

第3章
資料1　成分名一覧

胃腸薬	消化酵素	ジアスターゼ	
		タカジアスターゼ	
		ビオジアスターゼ	
		リパーゼ	
		プロザイム	酵素＝エン**ザイム**
		ウルソデキシコール酸	利胆作用（胆汁分泌を促す作用）で消化を助ける。コールとはギリシャ語で胆汁のこと。ちなみにコレステロールは胆汁酸の原料で「コレ」は「コール」と同じく胆のことを指す。胎児毒性の恐れがあるため、妊婦は要相談である。
	胃粘膜保護、修復成分	アズレンスルホン酸ナトリウム	
		アルジオキサ　※アルミニウム配合	アラントインと水酸化アルミニウム（ヒドロキシアルミニウム）の複合体。胃の中でアラントインは組織修復を、アルミニウムは胃酸中和をする。透析を受けている人は使用を避ける。
		ゲファルナート	
		スクラルファート　※アルミニウム配合	スクロース（ショ糖）とサルフェート（硫酸アルミニウムのこと）の複合体である。
		セトラキサート塩酸塩	代謝されてトラネキサム酸になるので血栓のある人は要相談である。トラネキサム酸は止血作用や抗炎症作用がある。
		テプレノン	まれに起こる重篤な副作用：肝機能障害
		銅クロロフィリン酸カリウム	クロロフィルは葉緑素のことである。
		メチルメチオニンスルホニウムクロライド	略してMMSC、キャベツの搾り汁から見つかった成分で、キャベジンに配合されている。
	胃腸鎮痛鎮痙成分	ブチルスコポラミン臭化物	抗コリン成分である。胃腸だけでなく、子宮の過剰な収縮も抑えるため、イブプロフェンと共に配合された生理痛の薬、「Lペインコーワ」という商品もある。
		ロートエキス	抗コリン成分であり、下痢止めにも配合される。授乳中の人では、乳児の頻脈のおそれがあるため使用を避ける。母乳が出にくくなることもある。
		パパベリン塩酸塩	抗コリン成分ではなく、平滑筋に直接作用する。胃液分泌抑制作用はない。副作用として眼圧の上昇がある。OTC医薬品で使われている商品はないと思われるが頻出である。
	局所麻酔成分	アミノ安息香酸エチル	消化管粘膜への局所麻酔作用により、鎮痛鎮痙に使用する。メトヘモグロビン血症を起こすおそれがあるため、6歳未満の小児は使用を避ける。
		オキセサゼイン	消化管粘膜への局所麻酔作用により、鎮痛鎮痙に使用する。
	胃液分泌抑制剤	ピレンゼピン塩酸塩	抗コリン成分であり、M1ブロッカーとも呼ばれる。消化管運動には影響を与えずに胃液分泌を抑える。
	消泡成分	ジメチルポリシロキサン（ジメチコン）	シリコンのことである。消化管内容物中に発生した気泡の分離を促す。
	整腸成分	アシドフィルス菌	
		乳酸菌	
		ビフィズス菌	
		ラクトミン	ラクトは、「乳の」という意味である。
	整腸成分（生薬）	ケツメイシ	決明子は、「目を開く種子」の意味である。
		ゲンノショウコ	現の証拠は、「胃腸にすぐ効く」の意味である。
下痢止め薬止瀉薬	腸管運動抑制成分	ロペラミド塩酸塩	感染性の下痢では使用を避ける。オピオイド受容体刺激薬。乳幼児への使用で麻痺性イレウスを起こした事例あり、15歳未満使用不可。中枢神経抑制によりめまいや眠気の副作用あり。
	収斂成分	タンニン酸アルブミン	感染性の下痢では使用を避ける。アルブミンは牛乳たんぱくから作られるので、牛乳アレルギーの人は使用を避ける。
		次没食子酸ビスマス	感染性の下痢では使用を避ける。精神症状が出る可能性があるので、1週間以上使用しない。アルコールとの併用で副作用リスク増大。妊婦は使用を避ける。
		次硝酸ビスマス	
	腸内殺菌成分	タンニン酸ベルベリン	オウバク、オウレンに含まれ、抗菌作用と抗炎症作用がある。
		ベルベリン塩化物	
		アクリノール	黄色色素成分である。
		木クレオソート	正露丸の主成分である。局所麻酔作用や、過剰な腸管の蠕動運動を正常化し、水分や電解質の分泌も抑える止瀉作用もある。
	吸着成分	炭酸カルシウム	腸管内の異常発酵等によって生じた有害な物質を吸着させる。
		沈降炭酸カルシウム	
		乳酸カルシウム	

第3章
資料1　成分名一覧

便秘薬 瀉下薬	小腸刺激成分	ヒマシ油	腸内要物の急速な排除のために使用する。脂溶性成分（殺鼠剤、防虫剤）の誤飲には使用不可。激しい腹痛、悪心・嘔吐のある人、3歳未満、妊婦使用不可。
	大腸刺激成分	センナ	妊婦要相談、授乳婦は使用しない、または授乳を避ける。
		センノシド	妊婦要相談、授乳婦は使用しない、または授乳を避ける。腸内細菌によって分解され効き目を示す。
		ダイオウ	妊婦要相談、授乳婦は使用しない、または授乳を避ける。成分中にセンノシドを含む。
		ピコスルファートナトリウム水和物	妊婦要相談。腸内細菌によって分解され効き目を示す。
		ビサコジル	妊婦要相談、腸溶錠の場合もある→コーティングが溶ける恐れがあるので、服用後1時間は制酸剤を含む胃腸薬、牛乳の摂取は控える。
	無機塩類	酸化マグネシウム	浸透圧により、便に水分を加えてやわらかくする。
		硫酸マグネシウム	
	膨潤性下剤	プランタゴ・オバタ	車前草のことで、オオバコ科の植物である。たくさんの水と服用する。
	浸潤性下剤	ジオクチルソジウムスルホサクシネート（DSS）	腸内容物に水分が浸透しやすくする作用があり、糞便中の水分量を増して柔らかくする。
	その他	マルツエキス	麦芽糖＝マルトースを60％以上含み、麦芽糖が腸内細菌で分解（発酵）し生じるガスにより便通を促進。乳幼児の便秘に使用する。
浣腸薬	大腸刺激成分	グリセリン	排便時に血圧低下の恐れがあるため、高齢者や心臓病の人は要相談である。痔の人は、グリセリンが傷から入り赤血球破壊（溶血）、腎不全の恐れがあるため、要相談である。

点眼薬

点眼薬	ピント調節成分	ネオスチグミンメチル硫酸塩	コリンエステラーゼ阻害薬である。アセチルコリンを増やして毛様体筋を収縮させる。
	交感神経刺激成分	テトラヒドロゾリン塩酸塩	緑内障は要相談である。
		ナファゾリン塩酸塩	
	抗炎症成分	イプシロンアミノカプロン酸	炎症の原因となるプラスミンの産生を抑える働きがある。人エアミノ酸である。
		塩化リゾチーム	
		グリチルリチン酸二カリウム	
		プラノプロフェン	プロピオン酸系解熱鎮痛剤。OTC医薬品では内服では使われない。
	組織修復成分	アズレンスルホン酸ナトリウム	
		アラントイン	
	保湿成分	コンドロイチン硫酸ナトリウム	
		ヒドロキシプロピルメチルセルロース	
	抗ヒスタミン成分	クロルフェニラミンマレイン酸塩	
		ジフェンヒドラミン塩酸塩	
		ケトチフェンフマル酸塩	
	抗アレルギー成分	クロモグリク酸ナトリウム	
		アシタザノラスト水和物	※現時点、手引きへの記載はありません。
	抗菌成分	スルファメトキサゾール	サルファ剤である。
	無機塩類	塩化カリウム、塩化カルシウム、硫酸マグネシウム、リン酸水素ナトリウム、リン酸二水素カリウム	
	ビタミンA	パルミチン酸レチノール、酢酸レチノール	視力調整等の反応を改善する効果を期待して用いられる。
	ビタミンB2	フラビンアデニンジヌクレオチドナトリウム	目の組織呼吸を亢進し、ビタミンB2欠乏が関与する角膜炎に対して改善効果を期待して用いられる。黄色い液体である。
	ビタミンB6	ピリドキシン塩酸塩	アミノ酸の代謝や神経伝達物質の合成に関わり、目の疲れ等の症状を改善する効果を期待して用いられる。
	ビタミンB12	シアノコバラミン	目の調節機能を助ける。コバルトにシアン基のついた赤色の液体である。
	パンテノール	ビタミンB5	目の調節機能の回復を促す効果を期待して用いられる。
	ビタミンE	トコフェロール酢酸エステル	末梢の微小循環を促進させることにより、結膜充血、疲れ目等の症状を改善する効果を期待して用いられる。
	アミノ酸	アスパラギン酸K、アスパラギン酸Mg	新陳代謝を促す。アスパラガスから発見されたうまみ成分である。

第3章
資料1　成分名一覧

外皮用薬

皮膚用薬全般	抗ヒスタミン成分	ジフェンヒドラミン	
		クロルフェニラミンマレイン酸	
	かゆみ止め成分	クロタミトン	皮膚に軽い灼熱感を与えることで痒みを感じにくくさせる。
	局所麻酔成分	アミノ安息香酸エチル	
		リドカイン	
		ジブカイン塩酸塩	
	抗炎症成分	ウフェナマート	炎症を生じた組織に働いて、細胞膜の安定化、活性酸素の生成抑制などの作用により、抗炎症作用を示すと考えられている。
	血行促進成分	ヘパリン類似物質	ヒルドイドやアットノンの成分である。
	収斂成分	酸化亜鉛	患部のタンパク質と結合して皮膜を形成し、皮膚を保護する。患部が浸潤または化膿している場合、傷が深いときは、表面だけを乾燥させて悪化させるおそれがあるため使用しない。
皮膚用薬全般	角質軟化成分	サリチル酸	角質成分を溶解する。
		イオウ	皮膚の角質層を構成するケラチンを変質させる。
	保湿成分	グリセリン、尿素、白色ワセリン、オリブ油、ヘパリン類似物質等	角質層の水分保持量を高める
皮膚用薬抗菌薬	サルファ剤DNA合成阻害成分	スルファジアジン	
		ホモスルファミン	
	細胞壁合成阻害成分	バシトラシン	
	蛋白質合成阻害成分	クロラムフェニコール	
		硫酸フラジオマイシン	
皮膚用薬ステロイド性抗炎症薬	ストロング	デキサメタゾン吉草酸エステル	・末梢組織の免疫機能低下させる作用を示す。水痘、水虫、たむし、化膿した患部では使用を避ける。 ・コルチゾンに換算して1gまたは1mL中0.025mgを超えて含有する製品では特に長期連用を避けるとなっている。
		プレドニゾロン吉草酸エステル酢酸エステル	
	ミディアム	酪酸ヒドロコルチゾン	
		デキサメタゾン	
	ウィーク	プレドニゾロン酢酸エステル	
		ヒドロコルチゾン	
		酢酸プレドニゾロン	
皮膚用薬水虫薬ジュクジュク:クリーム、軟膏カサカサ(角質化):液体	第二世代	オキソコナゾール硝酸塩	糸状菌の細胞膜を構成する成分の産生を妨げる。
		ビホナゾール塩酸塩	
		ミコナゾール硝酸塩	
		シクロピロクスオラミン	糸状菌の細胞膜に作用して、菌の増殖に必要な物質の輸送を妨げる。
	第三世代	アモロルフィン塩酸塩	糸状菌の細胞膜を構成する成分の産生を妨げる。 ※第三世代にかゆみ止め成分が入ったものが第四世代である。
		ブテナフィン塩酸塩	
		テルビナフィン塩酸塩	
	その他	ピロールニトリン	菌の呼吸や代謝を妨げることにより、皮膚糸状菌の増殖を抑える。クロトリマゾールとの合剤で使われる。
		ウンデシレン酸	患部を酸性にすることで、皮膚糸状菌の発育を抑える。実在するOTC医薬品があるかどうかは不明である。
外用鎮痛消炎薬	第二世代	インドメタシン	喘息の人注意。塗り薬やエアゾールは1週間に50mL以上使用しない。
		ジクロフェナクナトリウム	喘息の人注意。塗り薬やエアゾールは1週間に50mL以上使用しない。
		ケトプロフェン	喘息の人注意。塗り薬やエアゾールは1週間に50mL以上使用しない。光線過敏症に注意する。オキシベンゾン、オクトクレリン(紫外線吸収剤)などの物質でアレルギーが出た人は使わない。
		ピロキシカム	喘息の人注意。塗り薬やエアゾールは1週間に50mL以上使用しない。光線過敏症に注意する。
		フェルビナク	喘息の人注意。塗り薬やエアゾールは1週間に50mL以上使用しない。
	第一世代	サリチル酸グリコール	皮膚から吸収された後、サリチル酸に分解されて、末梢組織(患部局所)におけるプロスタグランジンの産生を抑える作用も期待されるが、主として局所刺激により患部の血行を促し、また、末梢の知覚神経に軽い麻痺を起こすことにより、鎮痛作用をもたらすと考えられている。サロンパスの匂いの元となる成分である。
		サリチル酸メチル	

第3章
資料1　成分名一覧

その他

殺虫剤・忌避剤	有機リン系成分	ジクロルボス、ダイアジノン、フェニトロチオン、フェンチオン、トリクロルホン、クロルピリホスメチル、プロペタンホス	アセチルコリン分解酵素（アセチルコリンエステラーゼ）と不可逆的に結合して働きを阻害する。ウジの防除法としては、通常有機リン系殺虫剤が用いられる。
	カーバメイト系成分	プロポクスル	アセチルコリン分解酵素（アセチルコリンエステラーゼ）と可逆的に結合して働きを阻害する。
	オキサジアゾール系成分	メトキサジアゾン	
	有機塩素系成分（DDT等）	オルトジクロロベンゼン	神経伝達を阻害する。現在、有機塩素系の中では、これのみがウジ・ボウフラの防除の目的で使用されている。
	ピレスロイド系成分	ペルメトリン、フェノトリン、フタルスリン	神経伝達を阻害する。除虫菊の成分から開発された成分である。フェノトリンは殺虫成分で唯一人体に直接適用される。
	昆虫成長阻害成分	メトプレン、ピリプロキシフェン	幼虫がさなぎになるホルモンを抑制するホルモンに似た作用がある。さなぎにならずに成虫になる昆虫やダニには無効である。
	その他	ピペニルブトキシド（PBO）	殺虫補助成分である。
		ディート	効果が高く、持続性も高いとされる。生後6カ月未満の乳児への使用は避ける。
駆虫薬	回虫駆除成分	サントニン	回虫の自発運動抑制作用がある。主に肝代謝されるので肝臓病の人は要相談。副作用：一時的に物が黄色く見える、口渇、耳鳴りなど。
		カイニン酸、マクリ	回虫に痙攣を起させる。カイニン酸はマクリ（フジマツモ科マクリの全藻で海人草とも呼ばれる）から抽出される。
	回虫、蟯虫駆除成分	ピペラジンリン酸塩	回虫・蟯虫のアセチルコリン伝達阻害による運動筋麻痺作用がある。副作用：痙攣、倦怠感、眠気、食欲不振、下痢、便秘
	蟯虫駆除成分	パモ酸ピルビニウム	蟯虫の呼吸や栄養分の代謝を抑える。ヒマシ油、脂肪の多い食事、アルコールとの併用避ける。尿・便が赤くなることがある。
高コレステロール改善薬	高コレステロール改善成分	大豆油不鹸化物（ソイステロール）	腸管のコレステロール吸収を防ぐ。
		リノール酸	コレステロールと結合して代謝されやすいコレステロールエステルを形成し、肝臓でのコレステロール代謝を促す。
		ポリエンホスファチジルコリン	
		パンテチン	LDL等の異化排泄を促進し、リポタンパクリパーゼの活性を高めてHDL産生を高める。
	ビタミン成分	ビタミンB2（リボフラビン酪酸エステル）	脂質代謝に関与する。コレステロールの生合成抑制と排泄・異化促進作用、中性脂肪抑制作用、過酸化脂質分解作用を有すると言われている。
		ビタミンE（トコフェロール酢酸エステル）	コレステロールから過酸化脂質への生成抑制作用や、末梢の血行促進作用があるとされる。
貧血用薬	鉄	フマル酸第一鉄	便が黒くなることがある。
		溶性ピロリン酸第二鉄	
	その他の金属	銅	ヘモグロビンの産生過程で、鉄の代謝や輸送に重要な役割を持つ。
		コバルト	ビタミンB12の構成成分であり、ビタミンB12は赤血球産生に関与する。造血機能を高める。
		マンガン	糖質・脂質・タンパク質の代謝をする際に働く酵素の構成物質であり、エネルギー合成を促進する目的で、硫酸マンガンが配合されている場合がある。
	ビタミン成分	ビタミンC	消化管内で鉄が吸収されやすい形（ヘム鉄）に保っている。
循環器用薬	化学成分	ユビデカレノン（コエンザイムQ10）	肝臓や心臓などに多く存在し、エネルギー代謝に関与する酵素の働きを助ける。デカはギリシャ語で10のことである。ビタミンB群と一緒に使われることがある。
		ヘプロニカート	ニコチン酸遊離による血液循環促進作用がある。ビタミンEと組み合わせて使われることが多い。
		イノシトールヘキサニコチネート	
		ルチン	高血圧等における毛細血管の補強作用があるとされる。ビタミン様物質である。
	生薬成分	コウカ（紅花）	キク科ベニバナの管状花で、末梢の血行を促して鬱血を除く作用があるとされる。
滋養強壮保健薬	アミノ酸成分	システイン	肝臓でアルコール分解酵素の働きを助ける。髪や爪、肌などに存在するアミノ酸の一種。メラニン生成抑制作用もある。
		アミノエチルスルホン酸（タウリン）	全身に存在し、細胞の機能を保持している。肝機能改善作用があるとされる。
		アスパラギン酸ナトリウム	エネルギー産生効率を高め、骨格筋の疲労物質である乳酸の分解を促す。
	その他	ヘスペリジン	VCの吸収を助ける。
		コンドロイチン硫酸ナトリウム	コンドロイチン硫酸は、軟骨組織の主成分である。関節痛、筋肉痛等の改善作用を期待して用いられる。
		グルクロノラクトン	肝臓の働きを助け、肝血流を促進する働きがある。
		ガンマーオリザノール	米油、米胚芽油から見出された成分で、抗酸化作用を示す。VEと組み合わされることもある。